## ２．自然的環境

### （１）地　形

日本列島を横断している糸魚川・静岡構造線の西方には、西南日本を走る東北東－西南西の山系が北東から北に方向を変え、南アルプスの赤石山脈となって分布している。また、山梨県北東部の関東山地は、東北日本の特徴である南北方向の山系の延びが山梨県付近で東西方向に変わり、山梨県内では甲府盆地を北から囲むように変則的な山系の走りをしている。一方、甲府盆地南部の御坂山地は、東北東－西南西の走りが盆地の南部において南北方向の天子山地に折れ曲がって連なっている。この折れ曲がりの真ん中を裂くように北西、南東方向に八ヶ岳、富士山が位置し、大きな火山の山麓が拡がっている。そしてその中間部に三角形の甲府盆地がある。

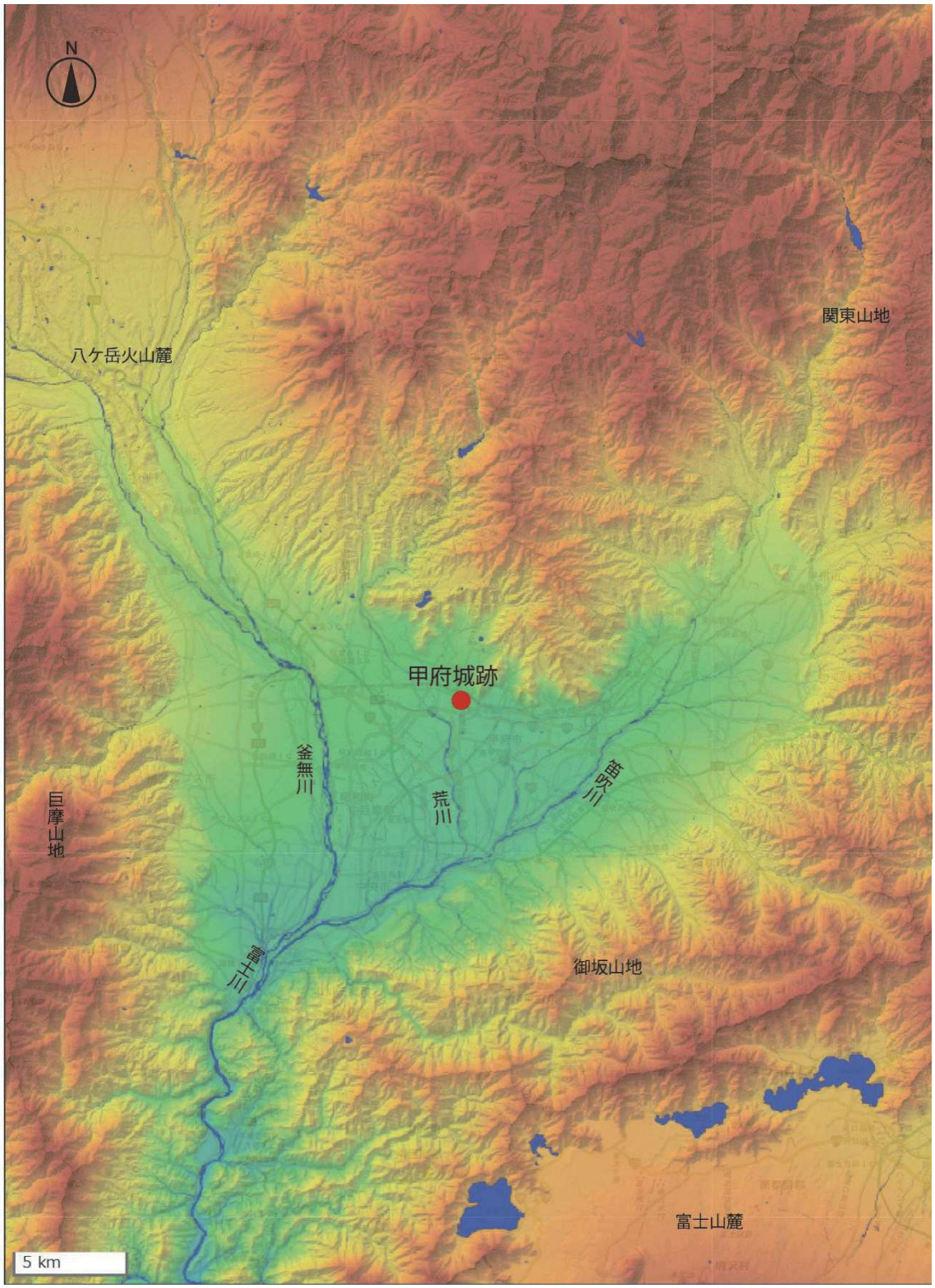
山梨県の地形区分で 3000～ 2000m 級の高い山地は、山梨県最西部の県境である赤石山地、最北部の県境である秩父山地地域である。2000～ 1000m 級の山地は、甲府盆地の北側に位置する北山山地、西方の巨摩山地、南方の御坂山地、県東部の道志山地、秋山山地、富士川沿いの身延山地、天子山地地域である。北西には八ヶ岳の火山と山麓地、南東には富士山と山麓地が拡がっている。甲府盆地西端、南東端には丘陵性台地がある。

甲府城跡は甲府盆地の中央北側に位置する。甲府盆地は、北を八ヶ岳・茅ヶ岳の火山群、東を大菩薩嶺の山塊、南を御坂山地、西を南アルプスの峰々に囲まれた内陸盆地で東西約 20km、南北約 10km の東西に延びたくさび型をなしている。

標高は、盆地東部の甲州市塩山で 400m、笛吹市石和町で 270m、甲府市甲府駅周辺で 270m、西部の甲斐市竜王で 280m、南部の中央市臼井阿原で 250m となり、東部及び北部で高く、盆地の南西端に向かって緩く傾斜した地形となっている。また、甲府盆地は八ヶ岳より南に流下する釜無川と、甲武信ヶ岳より南西に流下する笛吹川の二大河川及びそれらの支流によって形成された複合扇状地である。

釜無川や笛吹川の支流である御勅使川、荒川、金川、日川、天川等が盆地周縁の山地を開析してその山麓に扇状地を形成しているが、甲府盆地の扇状地の形成は、主として釜無川と笛吹川の運搬堆積作用によるものである。この二大河川は、盆地の南西端で合流し、富士川となって南下する。それと共に盆地は消滅する。

甲府城跡は荒川・相川により形成された扇状地の扇端付近にあり、沖積低地との境界付近に位置する。北に向かい緩やかに高くなる平坦地に鍛冶曲輪、楽屋曲輪、清水曲輪、花畑が配され、本丸、天守曲輪、二の丸、稲荷曲輪、数寄屋曲輪は一条小山と呼ばれた独立丘上に配置されている。

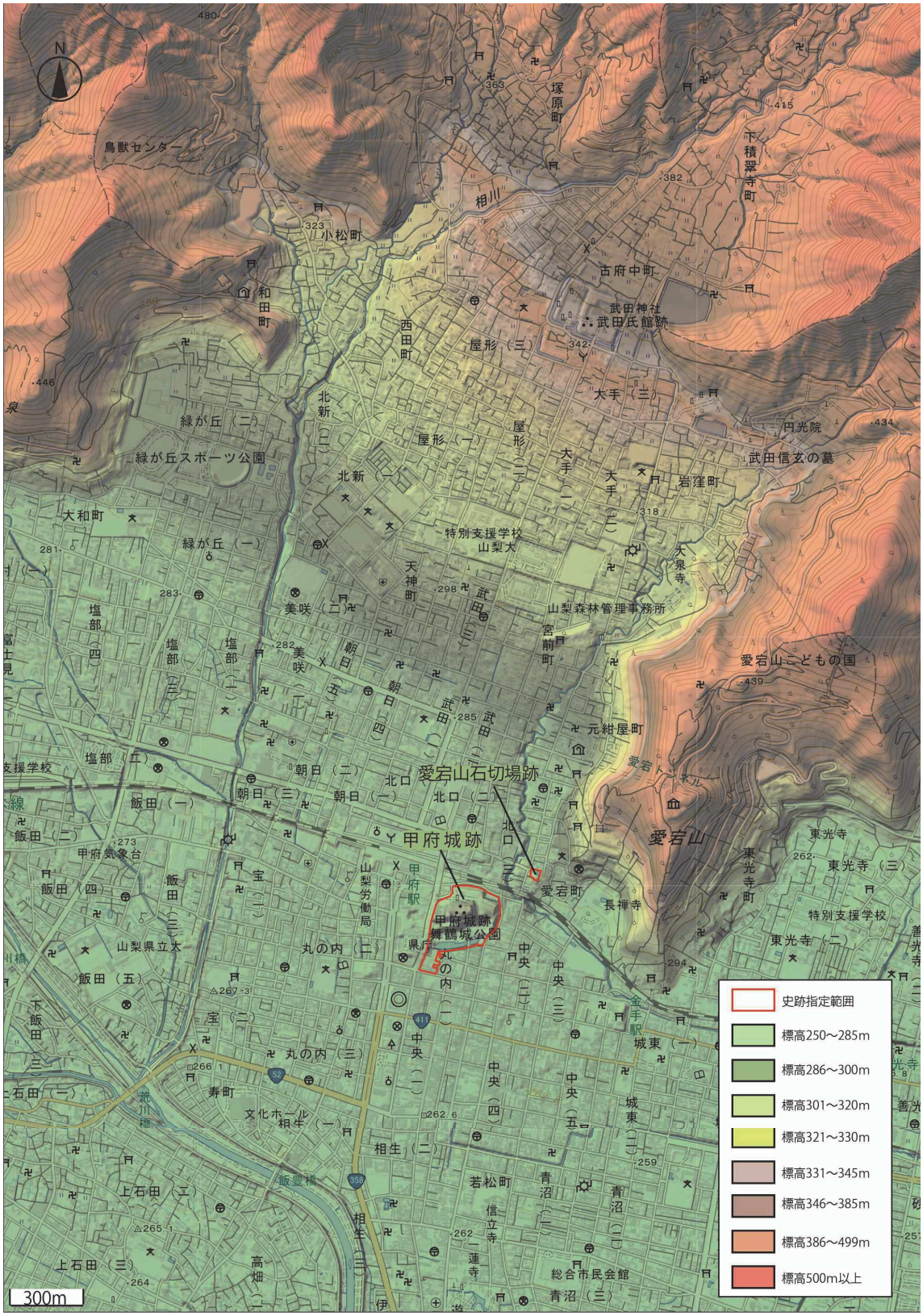



甲府盆地の地形図

（出典：国土地理院 地理院地図ウェブサイト

(https://maps.gsi.go.jp/#11/35.648997/138.610511/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f0&d=m)

色別標高図を加工して作成）




甲府城跡周辺の地形図

（出典：国土地理院 地理院地図ウェブサイト

(https://maps.gsi.go.jp/#11/35.648997/138.610511/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f0&d=m)

色別標高図を加工して作成）

## （2）地　質

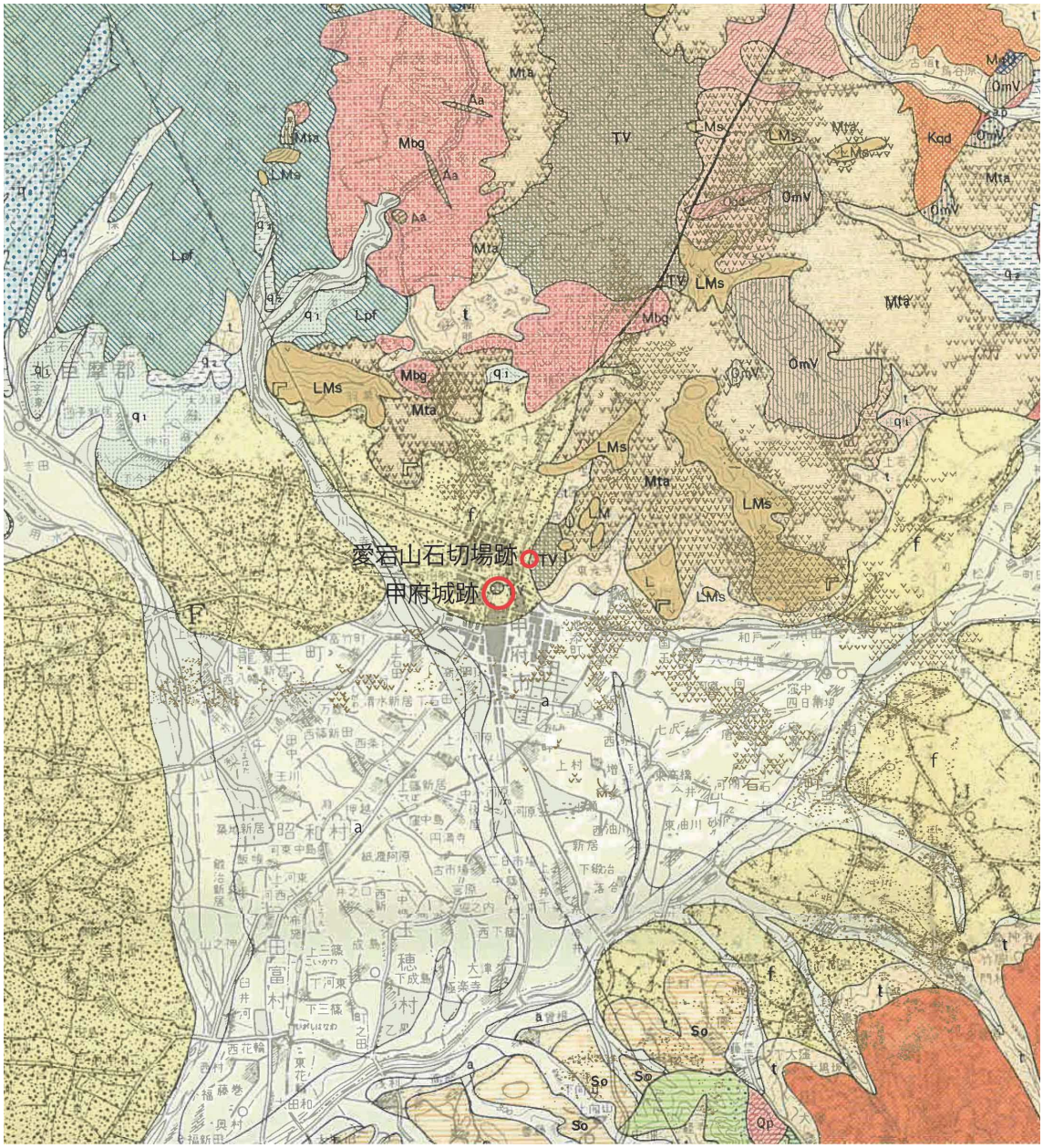
甲府盆地をとりまく山地は、北部が第四紀更新世の黒富士火山及び古八ヶ岳火山岩類（輝石安山岩～石英安山岩）と、新第三紀中新世末～鮮新世の水ヶ森火山及び太良ヶ峠火山岩類が認められる。東部は白亜系の小仏層群（砂岩、粘板岩、礫岩）とそれを貫く新第三紀中新世の花崗閃緑岩で、南部及び西部が火山砕屑岩（安山岩、玄武岩、凝灰角礫岩）を主とする新第三紀中新世御坂層群と、第四紀更新世の曽根層群（砂礫、粘土泥流、火砕流）で構成されている。これらは、甲府盆地の基盤として、砂礫層を主体として、粘土層、炭質物の薄層などを含む厚い地層の下に分布している（下表参照）。

甲府城跡の位置する甲府市丸の内の地質は、既往の地質資料（次ページ図）に示される様に、第四紀完新世の扇状地堆積物（地質図記号(以下「記号」という)：f）や沖積地堆積物（記号：a）の砂・礫・粘土による堆積物が広く分布する。東側～北側の山地には新第三紀鮮新世の水ヶ森等火山の安山岩（記号：LMs）及び水ヶ森火砕岩類（記号：Mta)、第三紀中新世末の太良ヶ峠火砕岩類（記号：Tv）が分布し、火山噴出物の安山岩及び火山砕屑物が広く分布する。昇仙峡付近などには新第三紀中新世の花崗岩類（記号：Mbg）も分布する。

このように甲府市の表層地質は第四紀完新世の扇状地や沖積地堆積物（記号：f 及び a）の分布地に該当するものの、甲府城跡周辺には、愛宕山方向から続く太良ヶ峠火砕岩類（記号：Tv）の分布が示されており、完新世の堆積物の下にはこの太良ヶ峠火砕岩類の分布が示唆される。

**甲府盆地周辺地質層序表**

| 地質時代 | | 地層名 | 岩層 |
|---|---|---|---|
| 第四紀 | 完新世 | 現河床堆積物 | 砂・礫・粘土 |
| | | 沖積地堆積物 | 砂・礫・粘土 |
| | | 扇状地堆積物 | 砂・礫・粘土 |
| | 更新世 | 黒富士火山噴出物 | 泥流・火砕流・熔岩 |
| | | 古八ヶ岳火山噴出物 | 泥流・火砕流・火山砕屑岩 |
| | | 曽根層群 | 砂・礫・粘土・泥流・火砕流 |
| 第三紀 | 鮮新世 | 水ヶ森火山噴出物 | 熔岩・火山砕屑岩 |
| | | 太良ヶ峠火山噴出物 | 熔岩・火山砕屑岩 |
| | 中新世 | 花崗閃緑岩 | 花崗閃緑岩 |
| | | 御坂層群 | 熔岩・火山砕屑岩 |
| 古第三紀 | | 四万十層群 | 砂岩・粘板岩・千枚岩 |
| | | 小仏層群 | |




| | | |
|---|---|---|
| 沖積地堆積層 | a | 砂・礫・粘土 |
| 崖錐堆積層 | t | 砂・礫・粘土 |
| 扇状地堆積層 | f | (比高：2～30m) |
| 低位段丘層 | $q_1$ | (比高：5～40m)<br>富士熔岩流 |
| 中位段丘層 | $q_2$ | (比高：40～60m)<br>含泥岩僧 |
| 曽根層群 | So | 砂・礫・粘土・火砕流 |
| 黒富士火砕流 | Lpf | 角閃石石英安山岩質火砕流 |
| | TV | 太良ヶ峠火砕岩類 |
| | LMs | 水ヶ森、横尾山<br>砥山複輝石安山岩 |
| | Mta | 水ヶ森火砕岩類 |
| | Kqd | 小鳥型、芦川型石英閃緑岩 |
| | Omv | 大久保火山岩類（三富層） |
| | Mbg | 御岳型、鳳凰型黒雲母花崗岩 |

甲府城跡周辺地質図

甲府城周辺の地形の状況

### （3）気　候

甲府市の気候は、内陸部にあることから、夏には蒸し暑く、冬は寒さが厳しい盆地特有の気候である。令和元年度のデータでは、年間平均気温は 15.9℃、最高気温 37.6℃、最低気温-5.9℃、年間降水量は 1,168.0mm となっている。

近年、温暖化に伴う夏日、猛暑日の増加や短時間および局地的な集中豪雨（ゲリラ豪雨）の傾向が指摘されている。甲府地域においてもその傾向はデータに表れており、日最高気温25℃以上の夏日、30℃以上の真夏日、35℃以上の猛暑日の年間日数はいずれも 2000 年（平成 12 年）以降が多くなっている。降水量についても、年降水量は特に多くなっていないが、日最大 1 時間降水量、月最大 24 時間降水量共に 2000 年以降が多い。

こうした気候の傾向を踏まえて、短時間・集中的な雨水への遺構保存対応、夏の来訪者やイベントに際しての施設対応について配慮していく必要がある。

**月別気象概況一覧表（令和元年度）：出典　甲府地方気象台ＨＰ**

(https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etm/index.php?prec_no=49&block_no=47638&year=&month=&day=&view=)

| 月／区分 | 平均気温（℃） | 最高気温（℃） | 最低気温（℃） | 降水量（mm） |
|---|---|---|---|---|
| 1月 | 3.6 | 16.0 | −5.9 | 6.0 |
| 2月 | 6.1 | 19.0 | −4.1 | 33.0 |
| 3月 | 9.6 | 25.0 | −1.1 | 63.5 |
| 4月 | 13.6 | 28.8 | −0.4 | 56.5 |
| 5月 | 19.3 | 35.2 | 5.5 | 68.0 |
| 6月 | 22.2 | 33.7 | 14.0 | 134.5 |
| 7月 | 24.8 | 36.4 | 18.3 | 190.5 |
| 8月 | 27.9 | 37.6 | 21.8 | 101.0 |
| 9月 | 25.2 | 37.1 | 16.7 | 63.0 |
| 10月 | 19.1 | 31.4 | 11.7 | 363.5 |
| 11月 | 11.9 | 24.4 | −1.0 | 33.5 |
| 12月 | 6.9 | 17.9 | −1.8 | 42.5 |

**甲府市における気象データ観測史上上位一覧表：出典　甲府地方気象台ＨＰ**

| 要素名／順位 | 1位 | 2位 | 3位 | 4位 | 5位 | 統計期間 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 日最大1時間降水量(mm) | 78.0<br>(2004/8/7) | 73.0<br>(1978/7/8) | 62.0<br>(2011/7/30) | 61.0<br>(1990/9/20) | 59.5<br>(2003/8/5) | 1937/1<br>2020/5 |
| 月最大24時間降水量(mm) | 294.5<br>(2000/9/11) | 233.5<br>(2002/7/1) | 208.0<br>(1982/9/12) | 205.2<br>(1961/6/27) | 195.0<br>(2014/10/5) | 1950/1<br>2020/5 |
| 月降水量の多い方から(mm) | 647.9<br>(1910/8) | 586.0<br>(2004/10) | 582.5<br>(1935/9) | 556.2<br>(1945/10) | 500.5<br>(2000/9) | 1894/8<br>2020/5 |
| 年降水量の多い方から(mm) | 1876.3<br>(1938) | 1653.8<br>(1910) | 1652.5<br>(1991) | 1644.5<br>(1921) | 1614.1<br>(1907) | 1894年<br>2020年 |
| 日最高気温25℃以上年間日数 | 156<br>(2013) | 150<br>(2018) | 150<br>(2004) | 149<br>(2019) | 149<br>(2005) | 1894年<br>2020年 |
| 日最高気温30℃以上年間日数 | 88<br>(2013) | 86<br>(2018) | 86<br>(2016) | 86<br>(2004) | 86<br>(1961) | 1894年<br>2020年 |
| 日最高気温35℃以上年間日数 | 34<br>(2010) | 31<br>(2018) | 31<br>(2013) | 31<br>(1995) | 29<br>(1994) | 1894年<br>2020年 |

## ３．歴史的環境

### （１）甲府城の歴史

#### １）築城前史

甲府城は愛宕山に隣接する一条小山と呼称された独立丘陵に築かれた織豊系城郭である。一条小山は、愛宕山に連なる小山であるが、すでに中世以前から藤川の浸食などにより愛宕山との繋がりを断たれ、独立丘陵として存在していたと推定される。

この一条小山とその周辺は、平安時代末期に甲斐源氏の武田信義の子忠頼の所領となった。忠頼は一条氏を称し、一条小山に屋敷を造営した（『甲斐国志』巻 78）。一条忠頼は、父武田信義、叔父加賀美遠光、安田義定らと共に平氏や木曾義仲との合戦で戦功があり、甲斐源氏の中心的な存在であった。ところが、元暦元年（1184）６月 16 日、源頼朝に謀叛の嫌疑をかけられて謀殺された（『吾妻鏡』）。その後、一条氏は甥信長が継承することで存続が認められている。

忠頼謀殺後、一条小山にあった館は忠頼未亡人が出家して尼となり、館を尼寺に改めたといわれる。その後、一条信長の子時信は、時宗の遊行上人（他阿真教上人）に帰依し、弟の法阿弥陀仏をその弟子にしたほどであったという。正和元年（1312）に時信は、一条忠頼未亡人が残した尼寺に法阿弥陀仏を開山として招き、ここを尼寺から時宗の道場とし、一蓮寺を創建した（『甲斐国志』巻 73）。一蓮寺は、鎌倉・室町期を通じて繁栄し、寺が所在した一条小山周辺には、その門前町が展開した。「一蓮寺過去帳」によると、南大門・東大門・横大門・西町屋・横町屋などの地名が確認でき、一条小山の南麓から西にかけて、東西南北それぞれ数条の街路によって区画された町場であったと推定されている（秋山敬「一蓮寺門前町の成立」『武田氏研究』19 号）。

永正 16 年（1519）武田信虎は、それまで本拠としていた川田の守護館を廃し、甲府に新たな居館を建設することを企画した。信虎の甲府建設は、一蓮寺門前町を包摂しつつ、有力家臣の城下集住、寺社の移転や新規造営、市場の開設を伴う大規模な事業であった（数野雅彦「戦国期城下町甲府の景観復元」『山梨考古学論集』Ⅱ）。武田氏の新館建設は同年８月 15 日から始まり、12 月 20 日には信虎が川田から甲府の新館に転居している（『高白斎記』）。信虎は、本拠地甲府の建設とあわせて、その防衛施設の整備にも着手し、躑躅ヶ崎館（武田氏館）に自身が移転した翌永正 17 年（1520）に積翠寺丸山に要害城を、大永３年（1523）に湯村山城の普請をそれぞれ行った（同前掲）。さらに信虎は、甲府の南側防衛のため、独立丘陵であった一条小山に注目し、ここにも砦を建設することを企図した。大永４年（1524）６月 16 日、武田氏は一条小山砦普請を開始した。そこで問題になったのは、山上にあった一蓮寺の処遇であった。信虎は、大永６年（1526）４月 27 日に一蓮寺を小山原に移し、新一蓮寺建立に着手している（同前掲）。これ以後、一条小山は武田氏の本拠地甲府の南側防衛の拠点として重視された。

武田氏は、信虎・信玄・勝頼と三代にわたって甲府を本拠地としてきたが、天正９年（1581）１月、勝頼は本拠地を躑躅ヶ崎から新府（現韮崎市）へ移転することを決定した。同年９月には新府城が落成し、11 月から 12 月頃には勝頼自身が入城した。しかし、天正 10 年（1582）３月に織田信長・徳川家康の侵攻を受け、天目山（現甲州市田野付近）での勝頼の自刃によって、武田氏は終焉を迎えた。

### ２）築城から廃城まで

天正 10 年(1582) 3 月の武田氏滅亡後、同年６月に織田信長が本能寺の変で自刃した後に甲斐を領有した徳川家康は、甲府を再び国の中心に据えた。８月には、新府を本陣に据えて北条氏直と対峙しながらも、10 月に氏直と和議を結ぶと新府を廃城とし、12 月には甲斐国の侍衆に知行を安堵した。家康の朱印状は、市川氏・小田切氏をはじめとする甲斐国諸侍に対し、12 月 1 日～９日の日付で発給されている。そして、12 月 12 日、家康は古府に陣を集め、12 月 21 日には、重臣平岩親吉を甲斐国郡代として 1300 石を宛行い、成瀬正一と日下部定好を甲府の奉行職に任じ、浜松に帰陣した。

家康自身の動静を甲府との関係でみてゆくと、天正 11 年（1583）には、４月、５月、８月に浜松から甲府に下っている。その内、４月には古府に在陣したとみられるものの、５月と８月には甲府の尊躰寺に旅宿していたことが確認できる。その後、家康が甲斐国に入ったのは、天正 13 年（1585） ４月である。家康は、６月７日に浜松に帰陣するまで甲府に滞在し、甲斐国の職人や門前の棟別銭等の諸役免除や知行安堵の四奉行連署状を発給している。この時期に発給された四奉行連署状は、いずれも「櫻井（黒印)、以清齋（黒印)、石四郎右（黒印)、玄随齋（黒印)」の順に四名の連署となっており、注目すべきは「櫻井」という苗字のみである点である。たとえば塩山向岳寺に出された諸役免許状のように、翌年の四奉行連署状は他の 3 人については同一であるにも関わらず、櫻井のみ「櫻井安芸守」と名乗っている。逆に言うと、「櫻井」のみで連署に加わっている文書は、天正 13 年（1585）に発給されたものということができる。

この点から逆に注目すべきは、年不詳卯月二五日付で、「東郡筋当社八幡乃神主」に宛て発給された四奉行連署状写である。これは、「於当社八幡相勉御番社人衆、自五月二日、同十一日まで十日御やといに候、於府中御城普請可被致之旨、可被相触者也」(『新編甲州古文書』1104 号 ）と、八幡神社社人を五月二日から十一日まで十日間雇い、「府中」で「御城」の普請をすることを求めた文書である。前述した四奉行連署の書式からみると、この文書が発給されたのは、天正13年であると推定することができる。とするならば、ここで「府中」すなわち甲府で行われていた「御城」の普請とは、甲府城の築城のことを意味しているとみられ、甲府の築城が天正 13 年（1585）に行われたということになる。この文書とあわせて注目されるのが、年紀はないが、正月二七日付で「平岩七助」に宛てて出された下知状である。これは、「一條山地形之儀、其国之諸侍相触、普請可申付候、石垣積近日可差遣候之間、油断有間敷候」(『新修徳川家康文庫の研究』) と、一条山の地形を甲斐国侍衆に命じて行わせること、石垣積みを担う石工は近日中に派遣する旨が述べられている。ここで述べられている城普請（地形）が、甲府城の築城であることは、すでに指摘されてきたが、文書の発給年次をめぐって、天正11年（1583）、13年（1585）、17年（1589）、18年（1590）と、諸説があった。しかし、平岩七助が天正一六年四月に、従五位下主計頭に叙任しており、それ以降は「平岩主計」を名乗ることから、この文書は天正 11 年（1583）か同 13 年（1585）に発給されたものとみられる。他方、天正11年（1583）に甲府城の築城が開始されたとみると、前述のように、天正 11 年（1583） ５月・８月に家康が尊躰寺に滞在していたことと整合性がとれない。逆に、この文書の年紀を天正 13 年（1585）と考えると、八幡神社社人を雇用して行う城普請と整合的に理解することができる。また、そもそも、当該期に甲府に所在していた躑躅ケ崎城は「御城」と呼称されず、「古府」という呼称で代表されており、「御城」

と呼称されるのは甲府城とみなすことができる。

以上のことから、甲府城は、小牧長久手の戦い後の家康が、甲斐国に地盤を固める動きの中で、天正 13 年（1585）正月から築城が開始され、５月はじめに社人らの上棟祭とともに築城が進み、５月いっぱいで主要な本丸部分の築城を終え、それを見届けて家康は浜松に帰国したと考えることが可能となる。なお、甲府城の築城年次を天正 13 年（1585）と述べるのは、『裏見寒話』である。『裏見寒話』は、18 世紀前期に甲府勤番士として赴任した野田成方がまとめた記録で、宝暦２年（1752）の序が付されている。明確に築城の開始時期を示す文書は掲載していないものの、これまで述べてきた文書史料による検討結果と一致する。

また、平成２年（1990）度から 15 年（2003）度の整備に伴い実施された甲府城跡の発掘調査では、羽柴秀勝の存在を示す桐紋瓦や金箔瓦等が本丸周辺で確認されている。この他にも、天正期に築城された城郭から多く出土する三葉均整唐草紋を施す平瓦や、色調や焼成が須恵器に類似する胎土をもち、瓦当面の連珠紋が奇数値である丸瓦、製作時の離脱材として離れ砂を使用するものなど、中世的な要素を持つ瓦が本丸周辺で多く出土している。これらの出土品は浅野期以前の様相を窺わせるものである。以上の状況からは、羽柴秀勝が赴任する天正 19（1591）年の段階では既に本丸周辺に瓦を載せた建物があったことも推察される。なお、石垣の部材として使用された栗石や積石からは、一蓮寺に関連したと考えられる石仏や石塔、石臼などが発見されており、築城以前の痕跡も遺されている。浅野期以前の出土品が認められる一方で、浅野家の家紋「違い鷹の羽」の施された瓦と、これに伴う五葉均整唐草紋が施された平瓦なども発見されており、浅野長政、幸長親子時代の痕跡も見られる。また遺構では、現在ある石垣の中に別の石垣が埋もれている地点などもあり、その造築年代や変遷等については今後の検討を要する。

このように、考古資料の様相からも、甲府城が天正 13 年（1585）段階で築城を開始され、本丸周辺に建物が構築された可能性が示唆される。今後、引続き考古資料、文書史料、そして石垣の状態等、総合的に検討を進めることが求められている。

さて、徳川家康により開始されたとみられる甲府城築城は、天正 18 年(1590)に、家康が関東へ移封された後には、豊臣秀吉により配置された大名らによって進められることになる。すなわち、羽柴秀勝（秀吉の甥）、加藤光泰（秀吉重臣）、浅野長政・幸長親子（秀吉一族、重臣）と変転するなかで、甲府築城は本格的に進められ、慶長５年（1600）ごろまでにほぼ完成したとみられるのである。

徳川氏以後、甲府築城に手を染めたのは、羽柴秀勝であったといわれているが、天正 18 年（1590）８月３日に、甲府桶大工勝村氏に対して伝馬役免許と引き換えに、「当城御用」のために動員することを通達した羽柴秀勝の文書が唯一の事例である（『山梨県史』資料編８所収史料１号）。だが、秀勝の甲斐在国はわずか八ヶ月あまりで終焉を迎えた。秀勝生母の嘆願により、天正 19 年（1591）３月頃、秀吉は秀勝を美濃国岐阜へ移したのである。このため、城普請の事業は、加藤光泰に引き継がれた。加藤氏は、天正 19 年（1591）10 月 19 日甲斐の杣衆に「当城江召遣」うために諸役免許の特権を与え（『同』史料 63 号）。さらに翌 20 日には下山大工衆に動員の通達を出し（『同』史料 64 号）、さらに 26 日には杣・大鋸衆 147 人の諸役免許を通達している（『同』史料 65 号）。

天正 19 年（1591）９月に豊臣秀吉が朝鮮出兵を諸大名に通達すると、加藤光泰もこれに従軍すべく、翌 20 年（1592）２月下旬に甲斐を出陣し、やがて朝鮮に渡った。光泰の留守

中も城普請は続いており、朝鮮に在陣中の光泰もそのことを気にかけていたらしく、文禄２年（1593）１月 14 日に、留守居役として甲府に残留していた一族・重臣加藤光政・光吉に対し「其国ふしん去年ひかしの丸石かき出来候や、此表之事、上様御存分ニ申付候て帰国仕、城をやかて見可申候」と尋ねている（『同』史料 157 号）。このことから、文禄元年（1592）には「東の丸」の石垣普請が実施され、光泰は帰国して城普請の出来栄えを見るのを心待ちにしていたことが窺われる。ところでこの「東の丸」の場所や、羽柴秀勝・加藤光泰の城普請を示す資料に登場する「当域」とは、甲府城ではなく武田氏館を指すものだという説も提起されている（数野雅彦「甲府城築城関係資料の再検討」『甲斐の美術・建造物・城郭』所収）。この説は、大州藩の藩史である『北藤録』所収の絵図中に、「古府中の城」（武田氏館跡地）の普請を加藤光泰が行い、その際に加藤氏が植栽した竹が「遠州藪」（加藤遠江守光泰にちなむ）として残されていることが記されており、これに対し甲府城は浅野氏が築いたとの記述があることも有力な傍証とされている。

加藤光泰は、文禄２年（1593）閏９月に朝鮮から帰国することとなり、釜山の西生浦に在陣していたが、８月 26 日の夜半に酒宴から帰ったところ体調を崩して重篤となり、同 29 日に急死した（享年 57 歳）。光泰は、死の前日の 28 日、浅野長政に宛てて遺言状をしたため、甲斐国は豊臣政権にとって枢要の地（かなめの地）であるので、若輩の作十郎（加藤貞泰）ではこの支配を担うのは無理であるため、これを直ちに収公し、他の大名に与えるよう秀吉に言上してほしいと依頼している（『山梨県史』資料編８所収史料 168 号）。このため秀吉は、光泰の遺児加藤貞泰を文禄３年（1594）１月 17 日付けで美濃国黒野に移し、後任の甲斐国主に一族浅野長政・幸長親子を任命した。

甲府城の築城は、浅野氏による甲斐の支配体制整備の一環としてさらに進められた。また特筆すべきは、同時期に平行して浅野氏は、都留郡（郡内）において勝山城の築城をも実施していることである。甲斐に築城された石垣を用いた織豊系城郭としては、甲府城と勝山城の２例が知られるが、その両方に深く関与していたのが浅野氏である。浅野氏は、文禄３年（1594）６月 20 日から大鋸引・杣への動員を実施し、また甲斐国内への夫役を賦課しており、（『同』史料 234～266 号）、同年 12 月には材木調達のため郡内の山造衆や百姓らに動員をかけている（『同』史料 253・256 号）。これが浅野氏による甲府築城の記録とされている。

ところが、文禄５年（1596）２月 12 日に杣・大鋸中に対して諸役免許の印判状を発給した後に、浅野氏による甲府築城関係資料はしばらく姿を消す（『同』史料 274 号）。これは、浅野幸長が豊臣秀吉の勘気を蒙り、能登に配流されたことと関係があると推測されている。その後、浅野幸長が慶長３年（1598）１月９日に、在陣中の朝鮮から甲斐に残留していた浅野忠吉に送った条目において、甲府城普請には甲斐に残留している侍はもちろん、草履取りまで動員して実施するよう指示していることから、まだ完成していなかったことが知られる（『同』史料 303 号）。そして、慶長５年(1600)までにはほぼ完成していたと想定されている（『甲府城総合調査報告書』等）。

慶長５年（1600）の関ヶ原合戦で、徳川家康が石田三成らを破って天下の覇権を掌握すると、徳川氏は東軍についた浅野長政を紀伊国に移し、家臣平岩親吉を甲府城代に配置して、城の修築を実施したとされる。慶長８年（1603）には、家康の第九子義直（五郎太、義利）が 25 万石で甲斐国主に封じられたが、自身は家康とともに駿府に滞在し、甲府には在城せず、甲斐は引き続き甲府城代平岩親吉の手に委ねられた。慶長 12 年（1607）、義直が尾張国

に転封されると、平岩親吉も附家老として尾張犬山に移った。幕府は、同年８月 15 日に、甲府城を平岩親吉から小田切茂富・桜井信忠（武田遺臣、徳川四奉行）に引き渡すよう命じ（『山梨県史』資料編８所収史料 421 号）、以後は城番制による管理下に置くこととした（第１次甲府城番制）。

その後、二代将軍秀忠の次男忠長が元和２年（1616）（一説に元和４年）に甲府城主となるが、これも江戸に在府したままで自身は在城せず、寛永９年（1632）に改易されるまで甲府に赴くことはなかった。なお、忠長改易に伴い、家老であった郡内勝山城代鳥居成次も改易処分となった。こうして甲府城は、再び城番制の管理下に置かれた（第２次甲府城番制）。

この城番制は、上級旗本２名が１年交代で担当したが、同一人物が数年後再任される場合もあった。なお、この第２次城番制は、寛文元年（1661）まで、29 年間に及んだ。

寛文元年（1661）、幕府は三代将軍家光の三男綱重を甲府城主とし、甲府藩（徳川氏）を創設させた。綱重は、寛文４年（1664）に幕府より２万両の援助を受けて、甲府城の大改修を実施している。この大改修工事は２年余に及び、稲荷櫓などが再建され、甲府城は偉容を取り戻したと推定されている。また徳川綱豊（綱重の子）は、元禄８年（1695）にも甲府城の修復を実施しているが、その規模や内容は不明である。

その後、甲府藩（徳川氏）は綱豊が五代将軍綱吉の養子となったため、解体されることとなった。そこで幕府は、宝永元年（1704）、柳沢吉保を甲府城主に任命した。吉保自身は、将軍綱吉の側用人として江戸に在府したため甲府に赴任しなかったが、宝永３年（1706）から甲府藩（柳沢氏）は大規模な甲府城の改修を行っている。この時の普請により、甲府城の北側に新たな曲輪（花畑）が造成され、また甲府城の建物や曲輪の名称、城下町の名称などの改称が実施されている（『楽只堂年録』）。柳沢氏による甲府城の改修は、同年（1706）にはほぼ完了したようであるが、正徳３年（1713）には、水害によって破損した石垣・堀などの修理が行われている。このように、江戸時代の甲府城は、甲府徳川藩と甲府柳沢藩によって大規模な改修が実施され、文禄・慶長期の築城以来の偉容を取り戻したのであった。

享保９年（1724）、幕府は吉保の子柳沢吉里を大和郡山に転封し、以後幕末の慶応２年（1866）まで甲府勤番支配によって甲府城は管理された。だが、甲府城は享保 12 年（1727）の大火によって、本丸書院・銅門を始めとする城内の建造物の多くが焼失した。これ以後、焼亡した城内の建造物のほとんどは再建されることはなかった。

幕府は、慶応２年（1866）以後、明治維新まで甲府城代を設置したが、大政奉還によってその支配を終え、明治元年（1868）に官軍によって接収された。

### ３）明治期から平成期まで

#### ア 明治期

幕末、偽勅使事件を経て幕府直轄地であった甲府城は対応を協議していた。明治元年（1868）３月、官軍東海が甲府にやってきて、甲府城の明け渡しを要求する。甲府城番は大急ぎで退去し、その翌日には官軍が城内を一般開放し、板垣退助らが入城する。明治３年（1870）には、城内の破損建物を廃し、番人を削減する。

甲府城は明治５年（1872）に陸軍省管轄となり、翌年には内城を保存し、二の堀・三の堀内については市街地化が決定された。この陸軍管轄下において明治９年（1876）までには城内に残る主な建物・土塀の撤去・払い下げが行われる。

明治６年（1873）に県令に着任した藤村紫朗は、新市街を建設するため、二の堀、三の堀の埋め立て（明治８年（1875））、その旧郭内の小道に沿って桜町などの新しい町を生み出し、「藤村式」と呼ばれる洋風建築により町並みを飾る。また、明治９年（1876）には、二の堀内跡地に甲府師範学校、県勧業製糸場、裁判所、県病院、さらに翌年大手役宅に山梨県庁舎を建設する。

甲府城内城部においては、明治６年（1873）に城内を開墾し桑桐を植え、明治７年（1874）には楽屋曲輪書院にて養蚕を実施するほか、勧業製糸場建設のための煉瓦石製造所を城内に設置し、それに伴い柳門を閉鎖する。

その一方で、明治７年（1874）および翌８年（1875）に甲府城の「古跡」としての価値を活用した公園整備を計画する。しかし、この計画が不許可とされたことを受け、藤村は方針を転換し、山梨県の殖産興業の一環として勧業試験場を明治９年（1876）に設置し、内城のほぼ全域を開墾して植樹を、翌明治 10 年（1877）には鍛冶曲輪に葡萄酒醸造所が建設される。明治 13 年（1880）には明治天皇巡幸に際し、勧業試験場の視察が行われ、天守台に玉座が設けられ県土の景色を眺めている。

明治 33 年（1906）、楽屋曲輪に甲府中学校が建設され、また、屋形曲輪は校庭として利用されることとなるが、その城郭としての形態は依然として維持されてきた。しかし、明治 29 年（1896）に甲府城内城部の清水曲輪が甲府停車場建設のため鉄道院に割譲され、明治 36 年（1903）には中央線が甲府駅まで開通したことにより、清水曲輪の大半と花畑の一部は消失し、市街化の波は甲府城の内城部にも及ぶこととなった。そのような中、天守台・本丸・二の丸・稲荷曲輪・数寄屋曲輪・鍛冶曲輪などを含む約 27,600 坪の範囲は「舞鶴公園」として明治 37 年（1904）に一般開放される。

明治 39 年（1906）の一府九県連合共進会開催に伴って、天守台には電飾された模擬天守が一時的に建てられたほか、鍛冶曲輪南側の内堀に遊亀橋が、稲荷曲輪には迎賓館の機山会館が建設された。

**イ　大正期**

大正６年（1917）、舞鶴公園を含む 37,209 坪の範囲が国から払い下げられ、村松甚蔵氏の寄付により県有財産となる。同年 7 月の山梨県議会において、明治末期の度重なる大水害からの復興のために、明治 44 年（1911）３月に明治天皇が御料地を山梨県に御下賜されたことへの謝恩の意を表するため、甲府城本丸に「謝恩碑」を建設する予算案が承認される。工事は大正６年（1917）12 月に起工され、材料となる石材を本丸に運ぶための搬入路が稲荷曲輪・人質曲輪・本丸の石垣を除去して敷設された。そして、大正９年（1920）12 月に総高約 30.3mの謝恩碑が本丸南西隅に完成され、大正 11 年（1922）９月に除幕式典が開催された。

**ウ　昭和期**

大正 15 年（1926）年の山梨県議会において、山梨県庁舎と山梨県議会議事堂を甲府中学校跡地（昭和３年（1928）移転）にあたる楽屋曲輪内に移転することが議決され、昭和２年（1927）に起工、昭和５年（1930）３月に竣工した。なお、山梨県庁舎建設に伴い、月見櫓台を含む二の丸南西側の石垣も解体されている。この山梨県庁舎建設工事に前後して、昭和２年（1927）から同４年（1929）にかけて、楽屋曲輪の西側から南側の石垣が解体され、それに面する内堀も埋め立てられ、その一部は民間に払い下げられた。

この後、内城における大規模な開発はしばらく陰を潜めるが、中央線や身延線の敷地確保をはじめ、戦後の住宅地拡大などにより、徐々にではあるが、屋形曲輪・花畑がほぼ消失し、数寄屋曲輪東側の内堀も埋め立てられた。そして昭和30年（1955）に追手門東側の内堀跡地に山梨県民会館が建設されると、内堀がさらに埋め立てられ、ほぼ現在も残る甲府城跡の範囲となった。舞鶴公園としてわずかに残された内城の部分においても、最大の特徴である石垣は、コンクリート積みや間地積みへと改変を受け、本来の姿から大きく変化した。また、山梨県立青少年科学センターを初めとする諸施設や、記念碑の建立も歴史景観の変貌に大きな影響を与えてきた。なお、昭和39年（1964）には、甲府市の申請に基づき都市公園「舞鶴城公園」として都市計画決定された。

このように、本来の姿から大きく変わる甲府城に対して保護すべく甲府城跡総合学術調査団が昭和42年（1967）に発足し、調査が開始され、昭和43年（1968）12月に市街地化を免れた5.2haが県指定史跡甲府城跡として告示され、昭和44年（1969）には甲府城の価値や調査成果を大成した『甲府城総合調査報告書』が刊行された。

**エ 平成期**

平成２年(1990)より山梨県土木部による舞鶴城公園整備事業が着手され、平成16年(2004)までに石垣改修や公園便益施設の設置、さらに稲荷櫓ほか３門が復元整備された。平成19年（2007）には甲府市により甲府市歴史公園山手御門として清水曲輪跡地が整備され、山手御門が復元された。

平成17年（2005）から平成21年度（2009）にかけて、山梨県教育委員会は甲府城跡保存活用等検討委員会を設置し、天守閣復元の可能性や本丸を中心とした歴史的建造物に関する広範囲な調査検討をおこなった。その成果を踏まえ、復元の検討が可能な櫓門２棟（鉄門・銅門）について、復元整備の可能性や方向性等を検討する甲府城跡櫓門整備検討委員会を平成21年（2009）に設置し、平成22年（2010）から平成25年（2013）にかけて実施した甲府城跡櫓門整備事業により本丸に鉄門が復元整備された。

また、甲府城に石材を供給した愛宕山石切場は、平成21年（2009）11月12日に「甲府城跡愛宕山石切場跡」として県史跡に指定された。

平成26年（2014）５月19日、山梨県考古学協会と山梨郷土研究会の連名により、「県指定甲府城跡の国指定史跡にむけて」とする要望書が山梨県知事と山梨県教育委員会教育長に提出された。それを受け、山梨県では平成30年（2019）７月31日に国史跡指定の意見を具申し、同年10月19日、文部科学大臣が文化審議会に史跡指定を諮問、同年11月16日、文化審議会が文部科学大臣に史跡指定を答申、平成31年（2019）２月26日、官報に史跡指定が告示された。また、令和２年（2020）３月10日、山梨県が管理団体に指定された。

甲府城歴史年表（築城前史～明治初頭まで）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 平安時代末期 | | | 甲斐源氏武田信義の子、一条忠頼が一条小山に館を造営 |
| 元暦 | 元年 | (1184) | 一条忠頼が謀殺 |
| | | | 忠頼死後、一条忠頼未亡人が出家して尼となり、館を尼寺に改める |
| 正和 | 元年 | (1312) | 一条時信が尼寺を時宗の道場として、一蓮寺を創建 |
| 鎌倉・室町期 | | | 一蓮寺が繁栄し、周辺には門前町が展開した |
| 永正 | 16 年 | (1519) | 武田信虎が本拠を川田から躑躅ヶ崎に移す |
| 大永 | ４年 | (1524) | 一条小山砦普請を開始 |
| | ６年 | (1526) | 一蓮寺を小山原に移す |
| | | | これ以降、一条小山は武田城下町の南側防衛の拠点として重視 |
| 天正 | ９年 | (1581) | 武田勝頼が本拠を躑躅ヶ崎から新府へ移す |
| | 10 年 | (1582) | 織田信長らにより武田氏滅び、信長の支配となる（城代：河尻秀隆） |
| | | | 本能寺の変の後、徳川家康が甲斐国を支配（城代：平岩親吉） |
| | 18 年 | (1590) | 豊臣秀吉、家康を関東へ移封 |
| | | | 秀吉、羽柴秀勝を配置 |
| | | | このころ甲府城築城が開始された |
| | 19 年 | (1591) | 秀吉、加藤光泰を配置 |
| 文禄 | ２年 | (1593) | 光泰、文禄の役に出兵し病没 |
| | | | 秀吉、浅野長政・幸長親子を配置 |
| 慶長 | ５年 | (1600) | 関ヶ原の戦い後、浅野氏が紀伊和歌山へ移封 |
| | | | 家康の支配となる（城代：平岩親吉） |
| | | | このころ甲府城が完成したと考えられる |
| | ８年 | (1603) | 徳川義直（家康九男）、甲府城主となる |
| | 12 年 | (1607) | 義直、尾張へ転封し、甲府城番制（武川十二騎）となる |
| 元和 | ２年 | (1616) | 徳川忠長（家光の弟）が甲府城主となる |
| 寛永 | 10 年 | (1633) | 忠長、謀反の疑いで高崎で切腹 |
| | | | 甲府城番制（第二次）となる |
| 寛文 | 元年 | (1661) | 徳川綱重（家光の三男）が甲府藩主となる |
| | ４年 | (1664) | 綱重、甲府城大修理を実施 |
| 延宝 | 元年 | (1673) | 綱重の子、綱豊が甲府藩主となる |
| 宝永 | 元年 | (1704) | 綱豊が六代将軍家宣となる |
| | | | 柳沢吉保、甲府藩主となり、大修理を実施 |
| | ６年 | (1709) | 吉保が隠居し、子の吉里が甲府藩主となる |
| 享保 | ９年 | (1724) | 吉里、大和郡山へ移封し、甲府勤番支配が始まる |
| | 12 年 | (1727) | 甲府大火で城内、城外に甚大な被害 |
| 慶応 | ２年 | (1866) | 勤番制を廃止して、城代を置く |
| | ４年 | (1868) | 板垣退助率いる官軍が甲府城開城 |
| 明治 | 元年 | (1868) | 明治維新 |
| | ３年 | (1871) | 甲府城が陸軍省の管轄下に入る |
| | ４年 | (1872) | 山梨県が成立 |
| | ６年 | (1873) | 内城は保存、二の堀、三の堀は市街地化が決定される。 |

近世甲斐国の支配体制の変遷一覧表

<table>
<tr><th>時代区分</th><th colspan="2">甲斐国主・藩主・甲府城代等</th><th>時代（開始年）</th><th>備　　考</th></tr>
<tr><td rowspan="6">織豊期</td><td>織田信長</td><td>甲斐：河尻秀隆</td><td>天正 10 年(1582)</td><td>穴山梅雪の本領（河内領）を除く</td></tr>
<tr><td>徳川家康</td><td>甲斐：平岩親吉</td><td>天正 10 年(1582)</td><td>穴山勝千代の本領（河内領）を除く</td></tr>
<tr><td>羽柴秀勝</td><td>―</td><td>天正 18 年(1590)</td><td>都留郡に三輪近家を配備</td></tr>
<tr><td>加藤光泰</td><td>―</td><td>天正 19 年(1591)</td><td>都留郡に加藤光吉を配備。石高 21 万石（推定）</td></tr>
<tr><td>浅野長政</td><td>―</td><td rowspan="2">文禄２年(1593)</td><td rowspan="2">都留郡に浅野氏重（良重）を配備し、勝山城を築城（2 万石）。石高 21 万石（長政 5 万石、幸長 16 万石）。後に太閤検地の結果により、22 万 5000 石となる。なお長政は豊臣秀吉の奉行として上方に在駐していたため、幸長が甲斐国主として入国</td></tr>
<tr><td>浅野幸長</td><td>―</td></tr>
<tr><td rowspan="13">江戸時代</td><td>徳川家康</td><td>城代：平岩親吉</td><td>慶長５年(1600)</td><td>都留郡に鳥居元忠を配備</td></tr>
<tr><td>藩主：<br>徳川義直</td><td>城代：平岩親吉</td><td>慶長８年(1603)</td><td>25 万石、都留郡に鳥居成次を配備</td></tr>
<tr><td>幕府直轄</td><td>城番：武川十二騎</td><td>慶長 12 年(1607)</td><td>第一次甲府城番制。都留郡は鳥居成次</td></tr>
<tr><td>藩主：<br>徳川忠長</td><td>城番：武川十二騎</td><td>元和２年(1616)</td><td>元和 4 年説もあり。石高 50 万石（うち甲斐は 18 万石）。都留郡の鳥居成次が忠長家老となる（寛永 9 年に改易）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">幕府直轄</td><td>城番：伊丹康勝</td><td>寛永９年(1632)</td><td>徳美藩主。都留郡には秋元康朝が配備される（寛永 10 年、1 万 8000 石で入封）</td></tr>
<tr><td>城番：幕府旗本</td><td>寛永 13 年(1636)</td><td>第二次甲府城番制。上級旗本 2 名が 1 年交代で城番を勤める。都留郡は秋元氏</td></tr>
<tr><td>藩主：<br>徳川綱重</td><td rowspan="2">城代：渡辺綱治<br>戸田周防守ら</td><td>寛文元年(1661)</td><td rowspan="2">25 万石（甲斐は 14 万 5000 石余）。都留郡は秋元氏（宝永元年武蔵国川越に転封）</td></tr>
<tr><td>藩主：<br>徳川綱豊</td><td>延宝７年(1679)</td></tr>
<tr><td>藩主：<br>柳沢吉保</td><td>―</td><td>宝永元年(1704)</td><td rowspan="2">22 万 8765 石余（甲斐三郡 15 万 1288 石余、内高 7 万 7477 石余）</td></tr>
<tr><td>藩主：<br>柳沢吉里</td><td>―</td><td>宝永７年(1710)</td></tr>
<tr><td rowspan="2">幕府直轄</td><td>甲府勤番支配</td><td>享保９年(1724)</td><td>上級旗本 2 名を追手支配、山手支配にそれぞれ任命。役高 3000 石、役知 1000 石。江戸城芙蓉之間詰、席次は遠国奉行の上席</td></tr>
<tr><td>甲府城代</td><td>慶応２年(1866)</td><td>駿府城代と同格。役金 2000 両</td></tr>
</table>